オニバスの温室内での生育

濱　谷　修　一

オニバス（Euryale ferox）は，中国，旧ソ連南部，インド，朝鮮半島，台湾，日本の湖沼に分布する一年草で，一属一種である。自然条件下では５～６月頃発芽し，まず，やじり型の水中葉を展開し，生育に伴い浮葉を展開する。浮葉は，はじめ切れ込みのある不完全な円形で，直径は５㎝程度であるが，新しい葉になるにつれて切れ込みが無くなり円形に近づく。夏には葉の直径は１ｍを越える。開花は８月中旬から９月で，水面上で開花する場合と，水面上に出ず開かない（閉鎖花）場合がある。受粉後約１ヶ月で結実し，株は気温の低下に伴い枯死する。

このような性質をもつオニバスを，温室内で栽培した。当園の熱帯スイレン温室は，一年中水温を28℃以上に保っている。現在この条件下で，展示栽培しているオオオニバス（Victoria）属（中央・南アメリカの熱帯原産。本来は一年草とされる。）は多年生を示す場合が多い。オニバスも，同様な条件下におくと，多年生を示す可能性があるか，また生育にどのような影響が現れるか，このような点を中心に観察を行った。

1987年９月下旬に福山市の千塚池においてオニバスの種子を採取し，網でふたをしたガラス瓶に入れて７～22℃（季節により変動）の水中に瓶ごと沈めておいた。オニバスの種子は粒により休眠の深さが大きく異なり発芽のタイミングが一定しないが，このうち数粒が1992年の夏の間に発芽し，1992年９月上旬には２～３枚の展葉（やじり葉）が確認された。

これらを９月９日に直径7.5㎝のビニールポットに鉢上げし，当園の熱帯スイレン温室内の池に沈めた。その後，大きくなった１株を10月12日に５号素焼き鉢に植え替えた。植え付け用土は，鉢上げ，植え替え共に，田土：ボラ土（微細粒）＝１：１（体積比）とし，体積比で約５％の固形肥料（油かす：骨粉：魚粉＝２：１：１）を混ぜた。鉢と水面との距離は，鉢上げ後約５㎝，植え替え後約15㎝とした。光条件に関する操作は行わなかった。

10月20日に一番花の出らいが確認された。この時，葉柄の数は７本，完全な葉（円形の葉）はまだ出ておらず，やじり葉から円形葉へ移行する途中に見られる切れ込み入り葉（直径約10～15㎝）が展開していた（写真参照）。このことから，オニバスは生育初期から花芽を分化する能力を持つことがわかる。しかし，1992年８月20日に前述の千塚池で観察した際には，葉は完全な円形をしており，直径が約１ｍあったにもかかわらず出らいしていなかった。８月20日の千塚池と，10月20日の温室内との環境条件を比較すると，日照時間の長さ，光強度は８月20日の方が上回っており，気温・水温はほぼ同じと考えられる。このことから光強度の低下，日照時間の短縮などが，花芽分化に関わっていると推察される。温室内では，その後３花らいが確認されたが，一番花を含みいずれも閉鎖花であり，水面上では開花しなかった。11月22日にこの株は枯死した。1991年には６月より熱帯スイレン温室内で，同様にオニバスを栽培し開花を見たが，この株も，12月中旬に枯死している。28℃以上の水温が維持されていても，11月～12月頃に枯死するのは，寿命によるものなのか，あるいは光条件をはじめとする外的要因によるものなのかは，現在のところ明らかではない。

今後は，オニバスの花芽分化・枯死と光条件との関連性について，さらに観察していきたい。

一番花開花時の草姿
（1992年10月20日撮影）